



TITLE:

音楽的才能の発達( Abstract\_要旨 )

AUTHOR(S):

山松, 質文

---

CITATION:

山松, 質文. 音楽的才能の発達. 京都大学, 1963, 文学博士

ISSUE DATE:

1963-03-23

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/211013>

RIGHT:

氏 名	山 松 質 文 やま まつ ただ ふみ
学 位 の 種 類	文 学 博 士
学 位 記 番 号	論 文 博 第 1 号
学位授与の日付	昭 和 38 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	音 樂 的 才 能 の 発 達

論文調査委員 (主 査) 教授 園 原 太 郎 教授 井 島 勉 教授 野 田 又 夫

### 論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、音楽的才能といわれるものをその構成因子について攻究し、特に遺伝素質的に規定される面と環境生育歴的に規定される面との抽出に努力し、その啓培の可能性と限界とにつき学的根拠を樹立しようとするものである。

そのために著者は種々なる角度からの接近を試みているが、大別して二つとすることができる。一つは、主として標準的な音楽才能テストを示標として、家系の比較、双生児の比較、文化度の異なる地域の比較、年令・男女等による比較を通して遺伝—環境規定度を検出せんとする試みであり、他は演奏訓練、あるいはリズム訓練、音痴の矯正等による教育効果を通して、音楽的才能における成熟—学習の関係をつまびらかにしようとするものである。前者には主として統計的方法がとられ、後者では主として臨床的・事例的方法が採用される。ただし著者のむしろ得意とするところは事例研究手法にあり、したがって常にこの観点からの考察が背景をなしている。

家系調査においては、かなり明瞭に音楽才能の遺伝素質的傾向が認められ、特にシーショアテストによるリズム判断および音記憶ではそれが顕著であったが、双生児比較では二卵性双生児の数が著しく少なかったためか、それほど決定的なことがいえなかった。むしろ環境規定度のほうが優先するという結果すら得られたが、データを詳細に検討して、ここでもリズム判断は遺伝規定度が比較的大であることを確かめている。シーショアテストの因子構造を分析するとき、リズム判断と音記憶が、他の項（高低判断、強弱判断、音色判断、時程判断等）と明らかに区別され、比較的素質的なものに関係するのではないかと推論される。しかし発達傾向や日米の比較、地域の比較では、必ずしもこれを遺伝素質的と限定するに足る結果は得られない。より素質的なものの上に形成されるが、その発達は著しく環境条件に依存すると考える。

教育効果についての研究の結果は、演奏訓練によって上達するものは、その楽器に特有の技術であり、リズム判断は年少者においては練習時間、練習期間とあまり関連しなかった。このことから著者はリズムが音楽の生産面においても受容面においても、比較的素質的なものと認めてよいのではないかと結論する。

しかも日本人においては、米国人に比べリズムは早期に発達するが後停滞する傾向を見せることから、ここにも発達を阻害する条件があるとして、詳細な事例研究を行ない、生活環境条件や身体性格等の重要性を指摘している。

かくして、音楽才能も人格の一面であり、全人格との関連においてとらえるべきことを強調するとともに、測定される音楽才能には、たとえばリズムのごとくより遺伝決定的なもの、音記憶や高低判断のごとく文化差異と著しい関連性を示すものなどがあり、音楽才能の発達を論ずるとき、一般文化ないし音楽文化との関連の上での分析の必要を説いている。

### 論文審査の結果の要旨

音楽才能の発達に関し、これほど多角的にかつ実証的に攻究したものは、本邦においては未だその例がない。もとより音楽才能の測定テストやそれに基づく因子論的解明は既に若干の先駆者はあるけれども、著者のごとく音楽才能の発現ならびに形成という視点から、その構成要因別の発達過程を実際の演奏過程・教育効果の分析を伴って吟味し、かつ広汎な地域的比較・家系調査・事例分析に基づいて遺伝・環境規定度の解明を試みたものはないといってよい。著者が本研究において重要な一つの目標とした音楽才能の素質的規定度の検出は十分なる成果を得たとはいえないが、かかる分離の困難なことは著者も十分予想しているところであり、むしろ本研究において明確な結果を得られなかったところに真相が示されているといってよいであろう。しかし著者の丹念な追求によって随所にもたらされた新知見—例えばリズム判断が演奏学習と関連しないこと、すぐれた音楽家系にはすぐれた音記憶がみられること、音高判断と音記憶水準に地域差による一貫した相違の認められること、日米人児童の音楽才能発達にみられる幾つかの時相的特徴の差異等々—は、著者のいうごとく、この錯綜する事態の機能的関係を解明する重要な鍵となることが期待される。

著者は音楽才能の客観的示標として各種のテストを用いたが、これら測定可能な部分的才能ではとらえられない音楽性の存することを否定せず、その解明を将来に残しているのは妥当な態度と認められる。統計的処理に若干妥当を欠く欠陥が指摘されるとはいえ、本論文が音楽才能ひいては才能一般の心理学説に貢献するところ大なりと認められる。

よって本論文は文学博士の学位論文として価値あるものと認める。